

# 『十里霧中』

## —— 息子たちのイギリス公立校体験記(4) ——

豊田 一秀

外国に暮らすと、何事に付けても物事を自国と比べている自分が付くことがある。しかし、

考えてみれば「外国」「自国」と言っても、それは正確にはどちらも「限られた自分の体験」の寄せ集めと言うべきもので、限界や片寄り回避を避けるべくもない。そのことを頭に置きつつも、イギリスの学校、子どもについての個人的な印象を少し

述べてみるところから今回は筆を起こしたい。

二人の息子たちが学校の授業で戸惑ったことは、学ぶということが「覚える」ことではなく「考える」ことであるというイギリスの教育の基本的な姿勢であったようだ。

イギリスの先生は、これから扱おうとする分野

に生徒が興味を持つように細かく心を砕いている。そのために、できるだけ生徒の日常に近いところから問題の糸口を見つけ出させようとしている。子どもが本気で「食いついてくる」ように、その単元を用意する先生の努力や教科書の姿勢は日本にも大いに参考になるように思えた。なお、イギリスの教科書は立派な物であるが通常、個人持ちではなく、生徒に貸し出されるといふ形を取っている。

授業では、正解を求めるといふよりは、あなたはそれについてどう考えるか、という問いかけが多くなされる。生徒は資料を多く集め、自分の意見を論理的に述べることを求められるのである。子どもたちは言葉の問題にも増して、この形式の設問に面喰らったようであった。この設問に答えるには、暗記に比べ時間がかかり、なおかつ自身を問いに関与させなければならぬ。息子が

「ああ、めんどくさいな、こんな問題！」という気持ちだが、内心分かるような気持ちがしたと同時に、今まで日本で息子たちがしてきた勉強の質そのものが問われているような思いであった。このような設問をすれば先生もマルかバツかのみで評価する訳にもいかず、コメント付きの評価ということになり、先生の仕事も大変な量になることが想像された。少し乱暴に対比させるなら、日本の教育が学びの量、効率に重きを置いているのに対して、イギリスの教育は学びの質に重きを置いていると言っても良いかもしれない。知識の量は日本の子どもの方が多いが、身につけた知識はイギリスの子どもの方が深い、ということなのだろうか。

イギリスのこの教育の姿勢は結果として、個を伸ばす事にもつながると言えよう。問題に食いついて行けば、それ相応の応答が教師から得られ、

例え教師の意見に反対してもそれに一理でもあれば多少不完全であっても認められる。この暗黙の了解は「自分を出すことは良いことだ」というメッセージを生徒たちに送る結果になっていると思うのである。

しかし、反面、この方法は設問に興味を示さなかった生徒や、問いそのものを理解できなかった子どもに対しては最低限の知識さえも保障しない場合があるという事実につながる。教師は、生徒がその学科や単元に興味を持つように努力はするが、最後のところは生徒の決定に委ねているように私には思えた。全員が全教科で同じように良い成績を取る等という事は、イギリスの教師はそもそも考えていないのである。

一事が万事で、この事実はイギリスの運動会 (SPORT DAY) を見ても感じられた。陸上競技を主体としたいくつかの競技が芝生のグラウンド

で行われるのであるが、参加したくない子どもは体操着さえ着ずに、一日芝生に座って観客気取りである。機会均等をうたって、リレーまでクラス全員参加で行ったりする日本の学校と比べると、余りの考え方の違いに当惑する程である。

このような、生徒の特性に合わせる教育の方法は高校 (SIXTH FORM) になるともっと徹底してきて、高校では生徒は三教科を選択して二年間その科目しか勉強しない。ただし教科の内容は大学並みとなる。その科目が凡、大学での専門につながる訳であるから、自分の将来は十六歳の時に大方は決めなければならないということになる。これには、時期が早すぎる、もっと広い基礎的な教養を身に付けさせるべきだという意見も多いようだが、自分の意見というものを持っていれば、もう自分の将来は自分で決められるはずだという判断があるのかもしれない。イギリスでは高

校生から急に大人っぽくなるのもこの辺に原因があるようだ（事実、バブリックスクールへ私立の寄宿制の学校へでは、高校から学校のバーでビールが飲めたりする）。

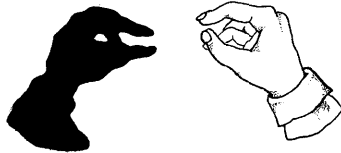
当然の結果として、成績が上位の生徒と下位の生徒との間では、学力のみならず広い意味での知識の差が大きくなってしまふ。そして、その差は一般の日本の生徒における差よりも大きいと私は思われた。日本でよく批判される、画一的な没個性の一斉授業が生徒の学力の差を少なくしているとも言えそうである。

これはイギリスに於て義務教育後の進学率が日本よりもずっと低いことにも関係がある。日本では九十パーセント以上なのに対してイギリスでは三十パーセント台（注1）

イギリスに於て、高等教育は本当に勉強をした人間が受けるものなのである。しかし、イギリ

スの教育のこのような勉強の仕方は、例えば家庭にどの位書籍があるか、親がどの位子どもの質問に答えられるか、どれだけ教育に消費出来るのかというような問題とも関係してくる。この事は階級社会を色濃く残すイギリスに於ては、中流以上の家庭の子女が良い成績を取りやすいというこの国の大きな社会問題につながっているのだが、本文ではこの問題には触れないでおこ

う。  
広い意味での学力の差が、イギリスの方が日本よりも大きいように思えると私は述べたが、私が強調したいことはこの差よりも、一



般のイギリスの子どもたちの態度である。小学生は大方は学校以外で勉強することもなく、のんびりしていて、それでいて知りたがり屋で日本の子どもより幼い感じがする。日本の子どもより、「じられていない」という表現が合っているかもしれない。中学生以上となると、勉強が今一つの子どもたちも生き生きとしていて、自信を持って生きていくように私には感じられるのである。彼等はどちらかと言えば自信過剰気味で、自分を強く主張し、余り他人の言うことに耳を傾けない、もう少し周囲から学び取ろうとする態度があれば良いのと思うことすらある。しかし、大人と対等に話す態度は堂々としている。日本の小学生が仲間同士で大人びた会話をしたり、早くも冷めた目で社会を見たりする一方で、大学生が往々にして大人と話が出来なかつたり、社会的な態度が育っていないかたたりするのに比べると興味深い。

日本人に英語を教えたことのある複数のイギリス人が、日本人は勉強意欲が強く真面目であるが、常に周囲の目を気にし、自信なげで、未成熟 (IMMATURE) だと感想を述べているのと比べ合わせても両者の差が大きいような気がしてならない。もっとも、私は未成熟には成熟の可能性が秘められていると思うのであるが、まあ、いざれにしてもこれは言わば文化の型の差とも言えるべきものであって、簡単にどちらが優れていると言えるような問題ではなく、興味は尽きない。

最後に、先生に勧められて次男がクラスで話したトピックについて書いてみたい。日本の学校について何か話して欲しいといわれた次男は、考えた末に日本の学校での掃除について取り上げた。日本では、校舎の掃除は主に生徒がしていること。それが校舎を汚さないようにする気持ちにながっている事などについて話したようだ。イギ



▲次男とサッカー仲間たち

リスの友だちの反応については分からなかったが、次男が「掃除」という点で文化の差を感じていることが面白く思えた。実際、イギリスでは幼稚園から大学まで、掃除は専門の人のやるべき「仕事」であって、自分で掃除をしてしまうことはその人たちの仕事を奪ってしまうことになると考えている節が窺える。これも階級制度の一つの名残なのであろうか。日本で古くから便所掃除に大きな教育的な意義を見出しているのと同様に思えた。もっとも最近の日本の学校は、さてさて？ であろうが。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園教諭)

注1 『バブルックススクール』竹内洋著、講談社現代

新書